

エッセイ

異郷に生きる～三宅島の人々・ 避難生活の日々～

伊与田 成美 (フォトグラファー)

三宅島が噴火し、全島民が避難してから2年半が経ちました。自然災害による全島民避難は衝撃的なニュースとして、当時各メディアに大きく取り上げられました。しかし時間の経過と共に、私達の関心はより鮮度の高いニュースへと移っていき、三宅島の事は少しずつ記憶から薄れてきているような気がします。

当初、私自身がその1人でした。三宅島噴火前後の時期には島の状況に注目していたのに、気がついたら過去の出来事として忘れかけていました。全島民避難から3ヶ月経ったある日、三宅島の人の避難生活がテレビ番組で取り上げられていたのを見て、初めてハッとしました。私達の何気ない日常のすぐ側で、彼らの異郷での暮らしがずっと続いていたんだという事に。

どんな思いで彼らは日々を過ごしているのだろう。これまでの生活を形成していたもの全てから離れた異郷の地での日々は、一体どんな風に積み重ねられているのだろう。2年前、そんな思いをきっかけに都内に暮らす島の人々と接し、写真を撮り始めました。

撮影を通して島の人々から最も強く感じたのは、彼らのこれまでの暮らしがいかに島の環境と深く結びついていたかという事でした。毎日目が覚めると畑に出ていき、日が暮れるまで鍬の音を絶やさなかったというおばあちゃんが東京の高層マン

ションの一室でじっと過ごす様子は心が痛みます。三宅島という土地に根付いて生きてきた人々にとって、島の空気や緑をぬける風・潮の香りが心身のバランスを保つ為にどんなに必要不可欠なものだったかがひしひしと伝わってきました。

しかし同時に、人間の力ではどうにもできない自然に寄り添って生きてきた人達だからこそ、この突然身の上に降り掛かった出来事に対して「雄山がまた人間を受け入れてくれる日を待つしかないさ。」といえるしなやかさ・遅しさを合わせ持ってもいます。昨年9月、遂に帰島の願いを果たす事なく亡くなった101才のおじいちゃんは最後まで「心はまるく、気は長く、くよくよしてもしかたがねえ。」と笑顔でまわりの人々を元気づけてくれました。人生の最後を過ごす事になった不馴れな環境に対しても「長生きはしてみるもんだな。こうして思いがけぬ体験も出来る。いつだって今が一番いい。」と喋っていたおじいちゃん。どんな現実にあっても、それを静かに受け止め乗り越えようとする姿は今も心に残っています。でも出来る事なら、「島に帰ったら蕎麦をつくって皆に御馳走する！」と張り切っていたおじいちゃんの姿を島で見たかったと思います。

今年、島の人々は遂に3度目のお正月を異郷で迎えました。現在、島から噴出している有毒ガスはようやくピーク時の6分の1まで減少し、帰島

の実現へ向けての期待は少しずつ膨らみつつあります。島での生活を取り戻すにはもう少し時間がかかりそうですが、故郷・三宅島へ帰れる日を待

ちながら懸命に生きる人々の姿を、これからも見つけ続けていきたいと思っています。



●家の前に見える景色が海から工場へ変わった。



●40年間、海に潜っていたというみどりさん。
「おっかねえし、恥ずかしいし、こんな所で働くとは夢にも思わなかったさ。」



●避難して6ヶ月。山田さん一家に待望の男の子がうまれた。



●「なんもすることがねえ」と勇治さんは向かいのビルの窓にとまるハトをずっと眺めていた。



●避難先で旦那さんを亡くした。
「ずっと患っていたから仕方ねえけど、せめて島の墓に入れてやりてえ。」

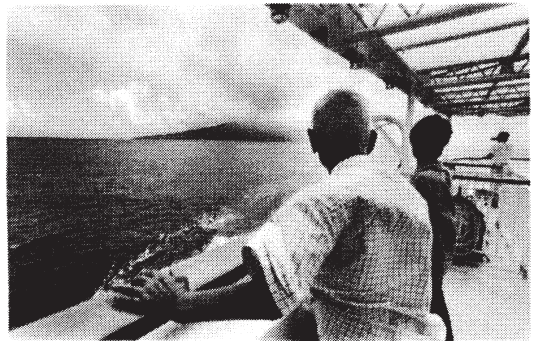
避難して1年後、
初めての一時帰島が実現した。



●もって行ける荷物の量は限られている。アルバムの中から大切な写真だけを抜き出す。



●1年ぶりに我家から眺める海



●しかし、わずか数時間の滞在で未だ有害ガスが出る島を後にしなければならなかった。

再び避難生活



●「毎日どこへ行くわけでもないし、喧嘩してばかりだけど、二人でよかったです。」



●「もう一度、畑で土いじりさせてあげたかった…。」



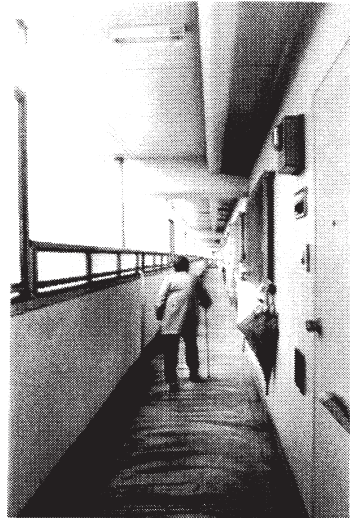
●「大正初期のうまれのもの。負けちゃならねえっていうのが信念さあ。」



●100歳の春雄さんと孫のまゆみさん。
「心は丸く、気は長く。くよくよしてもしかなかねえ」と二人で毎日散歩に出る。



●都内の老人ホーム。
「帰れるようになったら一番に迎えに来るからねえ」の声に「ありがとうよー」と手を合わせた。



●「島には気力と体力を持って帰る」と90歳の定子さんは7階の廊下を毎日歩く。